

否定についての論考－1：
Hornによる否定の記述的・メタ言語的二区分について
 Some Notes on Negation-1:
 On descriptive/metalinguistic dichotomy by Horn (1989)

山 崎 英 一
 Eiichi YAMASAKI

キーワード：descriptive/metalinguistic negation, Horn, implicature, Grice派, 関連性理論

0. 序

今回と次回の論稿からなる本論考は、Yoshimura(2013) (以下Y)により提起された諸問題に関する本論考(今回の論稿及び以降の論稿)執筆者の思索を記すものである。今回の論稿では、まずはHorn(1989) (以下H)によって主張される記述的否定とメタ否定とに関して、基本的にGrice派語用論の観点から検討したい。

本論考の契機となっているYは否定に関する論考であり、まずHに基づく否定(negation)の二分法(記述的否定／メタ否定)への問題点を提起し、少なくとも日本語に関しては代替的考えが必要であることを表明している。なお、Yの主張自体非常に価値あるものであり、時間をかけて検討すべきことから次回の論稿にまとめ、かつHとYの両説の優位性を検討したい。またこの際には、Yと同様Grice派の発展形と言える関連性理論の枠で検討を図りたく思う。

1. Hornの否定の二区分：記述的否定とメタ否定

語用論・意味論における否定研究においてLaurence R. Horn氏が第一人者であることはこの領域の学者にとっては良く知られていると思われる。Yが争点に選び、かつ簡潔にまとめている項目に、Hによる基本的な否定の二区分がある。この区分とは記述的否定(descriptive negation, DN)とメタ否定(metalinguistic negation, MN)である。¹⁾

(1) Hornによる否定の区分

	記述的否定 (DN)	メタ否定 (MN)
(i) 演算子	真理条件的演算子	非真理条件的演算子
(ii) 否定の焦点・対象	命題(内容)の真ないし偽性	発話の(あらゆる側面の)断定可能性 (assertability)
(iii) 機能	命題 p をとり not-p を返すこと	(先行)発話(U)に反対すること

(Y例(6)の訳、一部調整)

Hに基づきYは、(1)の記述的否定の例として(2)を、メタ否定の例として(3)をあげている。

(2) DN(記述的否定)

- a. A pig doesn't fly.
- b. It's not raining now.
- c. I haven't borrowed your pencil. (a ~ c : Yの例(4))

簡単に述べれば、この場合の否定は論理学でいうところの真理条件的否定(truth-functional negation)なので、否定のないバージョン、つまり肯定文とは真理値は矛盾関係にある。つまり肯定文が真ならDNの文は偽、肯定文が偽ならDNの例は真となる。

次に、やはり同様にYを通してHのメタ否定の例をみよう：

(3) MN(メタ否定)

- a. The king of France is not bald – (because) there is no king of France.
- b. Some men aren't chauvinists – all men are chauvinists.
- c. He didn't call the [pólis], he called the [polís].
- d. I didn't manage to trap two mongeese – I managed to trap two mongooses.
- e. Now, Cindy, dear, Grandma would like you to remember that you're a young lady:
Phydeaux didn't shit the rug, he soiled the carpet.
- f. I'm not his daughter – he's my father. (a ~ f : Yの例(5))

(3)の例群も踏まえると、(1-iii)での、Hの言う「発話に反対すること(objecting to an utterance)」は、「(通常話の内容ではなく)話の言い方に反対する」ということであり、更に以下とも関連付けて言い換えるならば、「(発話相手ないし先行発話の)言い方や表現の仕方が不適切である」ということを示すことができるであろう。²⁾

この特徴づけからわかるように、発話の内容に相当する命題内容には関与しない、つまりnotがあっても真理値を肯定文のそれと反転(真なら偽、偽なら真)させるわけではないので、例えば(3c)では、発話者が真の発話を発しているとの想定の下では、前半の否定文は“彼は警察を呼んだ”こと自体を否定するわけではない(このことは後半の肯定文と矛盾関係にないことから明らかである)。ここでは“police”の発音に反対の念を示しているのである。他の、(3b)や(3d)~(3f)でも否定文と後続の肯定文が矛盾関係にないことも同様に説明できる。なお、MNで反対されているのはH, Yによると(3a)が前提(presupposition)、(3b)スカラー推意(scalar implicature)、(3c)発音、(3d)形態素、(3e)使用域(register)や文体(style)、(3f)暗示的意味(connotation)である。なお、この種の否定は、Yでも主張されているが、日本語では通常別の表現形態「…というわけではない」「…のではない」を用いる。全くの余談ではあるが、このようにメタ否定時も、英語では通常否定文と同様の位置・表現で示されるのは、日本人英語学習者が悩む所でもあろう。

YはHのこの区分に関する問題として、紛らわしい例として(4)でのBをあげている。

(4) A: Tom played truant from school yesterday.

B: No, he didn't play truant from school. He was sick in bed with a bad cold. (Y(7))

Yによると(4B)はDNでも、MNでもあるように思える。つまり、MNは先行発話のいかなる側面に対しても反対することができる定義づけられていることから、その反対する対象が命題内容であるという特殊な場合、つまり先行発話の命題内容に反対する場合、DNと区別がつかなくなるというのである。次節ではこの点も含め、Hの二分法やYの指摘に起因する思索を、両者の枠組み内というより、伝統的な語用論の一観点である字義(文義)と行間意(推意)とから推し進めたい。³⁾

2. 思索：字義と推意からの考察

前節で、(4)はDNかMNで区別がはっきりしない場合があるとの指摘に触れたが、この点を出発点かつ分岐点に、大きく二群(考察1、考察2a, b)の流れで思索を進めたい。一つ(考察1)は「二種類の否定を一種類化(特にMNへの収斂)の可能性について」で、もう一つ(考察2群)は逆に「両者に区分があると前提した場合の両者の異なり」についての思索である。

2.1. 考察1：MNへの収斂可能性

まずは二種類の否定がMN一種類に収斂し得る可能性について検討する。

考察1:

否定はMN(メタ否定)一種類に収斂できるのではないか。

上記(4)の箇所でのYによる指摘は、DNともMNともはっきりしない例があるというものである。特には、MNの発話では、先行発話のどのような側面に対してでも発話者は反対できることから、先行発話命題の反対される対象が命題内容である(つまりは真理値へ反対する)場合がMNの下位例としてありうることになり、これが問題とされた。この観点を更に一般化すると、DNはMNの特殊例にすぎない可能性が生じる。つまり、(少なくとも英語の例において)否定はMN一種類であり、DNは特定の条件時に生じる一類にすぎない、という可能性である。英語においてDNもMNも同じ表現形態(notの使用)で可能であることや、上記注3でも示唆したように、発話文の代用と考えられる“Yes./No.”での“No.”にもDN、MNいずれの代用としての機能が想定し得ることがこの可能性を補強するであろう。

この思索の路線は(適切に延長できればだが)かなり大きな影響・展開可能性を有する。まず第一に、DNとMNとのステータスに関しての逆転可能性である。従来、二種の否定DNとMNにおいては、DNの方がコア的ないしデフォルト的、すなわち無標として位置づけられてきたと思われる。つまり、「通常の否定」と言えばそれはDNを指してきた。Yも述べるように、日

本語ではMNが通常「ない」のみという簡易な表現では表現しにくく、「のではない」等で示されることが多い、つまり有標であることにも傍証されよう。しかし、本論考の上記の思索が正しい場合、少なくとも英語ではコア的なのはMNであり、頻度的にはともかくDNはその特殊例であるということになる。

第二に、あるいは更に大きな影響として次のことが検討し得る。つまり、例えば、従来語用論、特にGrice派では“and”や“no”等は&や-（論理演算子のNOT）等論理学でのそれを中核的意味として有し、派生的な意味はその中核的な意味に+ α する形で語用論的に導出されると考えてきた。最近ではCarston(2002)が示唆したように、“and”は意味論的（つまり字義的に）空であり、論理演算子としての&の意味を有していない可能性（“and”についての意味論的空仮説）も議論されているが、本路線はこれ以上の破壊力を持つ。つまり、“and”と&との場合は、一英単語に従来思われていたような論理学的意味がない（だけ）という問題であり、一つの単語の問題に過ぎない可能性がある。一方ここでの議論の場合、“not”や“No.”に観察されるように、（少なくとも英語の）否定全般の本質的な意味は非真理条件的なMN（メタ否定）であり、本来本質的と考えられていた、論理演算子としての意味はむしろ派生にすぎないということであり、単語ではなく「否定」全般の議論ということになるからである。この可能性や正当性がもしも、一方には“or”のような他の論理語にも一般化できたり、他方に日本語等他言語にも一般化できるとすると、「コアかつデフォルト的とも想定されることのあった、論理語としての解釈が実は派生である」つまり「自然言語での論理的な動きは、多様な情報処理の一部にすぎない」ということにつながり得る。これは、Grice派以前の「自然言語や人間の思考活動は非論理的である」という立場から、Grice派によるパラダイムチェンジ、つまり「自然言語や思考活動は論理+ α （語用論的活動）によるものであり、核としては論理的である」に至ったのに匹敵する次のパラダイムチェンジ（しかもむしろ元に戻る動き）とも言えるものである。もちろん、外延的には「論理+ α 」の活動結果と「論理を含む認知的情報処理」とは同一である可能性はある（両観点共に、人間は論理的な動きも、一見非論理的な動きもするという観察と矛盾しない）。が、中核な部分に何を想定し探究をするのかという点では互いに逆とも言える視点であり、その点でパラダイムチェンジに繋がり得ると指摘しておきたい。

本論考で扱うには思索の展望が大きくなりすぎたので、考察1の思索に関してはこの時点ではこの程度に留め、考察2群に進み、2.3で再度検討する。

2.2.1. 考察2a：両者の区分に関する思索-1

本節では前節とは逆に「両者は別物である」との観点から、その区分に関し思索する。

考察2a：

メタ否定と記述的否定との違いは推意で判断すべきではないか。つまり、メタ否定(MN-p)においてはメタ否定部を除いた情報(命題部)pは推意だが、記述的否定ではそうではない、つまり命題であって推意ではないという違いがあるのではないか。

考察の前提として、発話に関する「意味」の大枠として字義(what is said)と推意(implicature)の二区分からの思考に割り切っていくこととする。これは旧来のGrice派の区分(例 Levinson (1983))の観点から考察するということである。Yや本論考執筆者の本来属する学派である関連性理論では、Grice派という推意を二分割し、推意と表意(explicature)とに分ける(例 Sperber & Wilson (1995))が、Hは関連性理論の学派に属さないことや、思考の大筋の明瞭化を優先してのものである。

この観点からMNの例を再度観察する。(3c)を取り上げよう。この例ではメタ否定は発音をその否定・反対の対象としている。命題に反対する事例を除き、通常時MNは命題及び真理値自体に影響を与えないことから、(3c-1)と(3c-2)での発音部の違いは無視して両発話を次のように記号化する(端的に言えば、MN-pは「MNがついたHe didn't call the police.」の記号化である):

- (3c) 1. He didn't call the [pólis] ⇒ MN-p
 2. He called the [polís]. ⇒ p

通常のMNの例(つまり命題内容に反対する例ではなく、命題内容の真理値に影響を与えない例)であるので、同一発話者が(3c-1)と(3c-2)を続けて発話しても、MN-pとpとが矛盾しないのはYやHに基づく前節での指摘通りである。

ここで注視したいのは(3c-1)の持つ推意である。前節で触れたように、Hの言うMNの機能「発話に反対すること(objecting to an utterance)」を「(発話相手ないし先行発話の)言い方や表現の仕方が不適切である」ととり、更に「先行発話内容の真偽には触れない(つまり問題が真か偽であるかにはコミットしない)が、表現の仕方に問題がある」と考えよう。(3c-1)では、「警察を呼んだことを示す情報の提示に何らかの問題がある」ということになるが、後続発話(3c-2)との違いにより、不適切な言い方ないし問題のある表現方法は発音であることがわかる。つまり(3c-2)部との兼ね合いから統合的に、MN-pの字義は「[pólis]という発音の仕方は不適切である」ということになる。

ではこのMN例での推意は何であろうか。[pólis] [polís]を“police”で読みかえて解釈すると、上記pはつまり「警察を呼んだ」ということである。仮説としてこのpを推意であると仮定しよう(より厳密には「pは真の情報であると主張する情報」を推意と仮定する)。すると、(3c-1)の持つpという推意に後続する形で(3c-2)の字義であるp命題が続くことになる。一見余剰的(redundant)であるが、Levinson (1983)等従来Grice派で良く知られているように、推意は強化できる(reinforceable)ことからここは問題がない。つまり、先行する推意pを後続部のpが、その推意の解釈を保証する形で強化しているということである。⁴⁾

別方向からpが推意であることを検討しよう。(5)を考える。

(5) He didn't call the police.

通例の解釈では(5)はDNであり、not-p、つまり「警察を呼ばなかった」が字義となる。当然矛盾命題となるpが推意となることはなく、かつ後続発話にp “He called the police.” (指示対象や時間帯が同一とする)が来れば矛盾することになる。⁵⁾

以上をまとめると、表面上 “NOT-p” (つまり否定辞notを用いた否定文の形式)で表記されるDNの例とMNの例とにおいて、pに関しては次のようになる：

- (6) a. DN(記述的否定)の発話：not-p(pの否定命題)が字義のため、これと矛盾する命題であるpは字義でも推意でもない。
- b. MN(メタ否定)の発話：pは推意である。

次に、not-pとpに関し逆の観点から、つまりnot-pの方を推意と仮定した場合の両種の区分を検討する。

2.2.2. 考察 2 b：両者の区分に関する思索-2

前節と逆の観点を考察 2 bにまとめる：

考察 2 b：

メタ否定と記述的否定との違いは推意で判断すべきではないか。ただし考察 2 aとは異なり、メタ否定においてはnot-pが推意である。(記述的否定ではnot-pは字義である。)

考察 2 aではpをMN発話での推意としたが、逆にnot-pを推意と仮定してみる。上記のようにDN発話では字義がnot-pである。⁶⁾ この仮定時、(6)に対応する見解をまとめると次の(7)のようになる：

- (7) a. DN(記述的否定)の発話：not-pは字義である。
- b. MN(メタ否定)の発話：「先行発話に反対する」のが字義であり、not-pは推意である。

この仮説のbをMNを含む例である(3 c)の下で考察する：

- (3 c) 1. He didn't call the [pólis] (推意：not-p)
- 2. He called the [polís]. (字義：p)

この仮説の下では(3 c-1)の時点でnot-p(警察を呼ばなかった)が推意として生じるが、(3 c-2)ではp自体が字義として生じている。両情報が通常の主張命題(字義)であるならばnot-pとpとで矛盾に陥ることになるが、ここでは全体としてpの命題情報は伝達されてもnot-pは伝達されない。このことは、上記強化可能性(reinforceability)同様従来から知られている特性である、推意が取り消し可能(cancellable)である(Levinson(1983))ことから説明がつく。つまり、推意

not-pが生じて、後半の命題pがそれを取り消してしまうということである。

現状考察2aも2bも仮定を立てる際に破綻することはない。が逆に特に決め手もないため互いの優位性も、更には考察1に対する優位性もない。そこで、特例での(4)を再度検討し、この例が考察2群に影響を与えるのか、考察1と2群とに差異を生じさせるのかの点を考察したい。

2.3. 特例(4)と考察群

最初に考察2群内での(4)の位置づけを計ろう。関心の対象としては、(4)の例との親和性(の高さ、有無等)から考察2a、ないし2bの優位性、あるいは問題点が明らかになるのではないかと、いうものである。

以下、再度(4)を検討するが、混乱を防ぐためまずは考察2a及び2bを一旦脇におく:

(4) A: Tom played truant from school yesterday.

B-1: No, he didn't play truant from school.

B-2: He was sick in bed with a bad cold.

ここでBの否定発話(B-1)をMNの発話とし、要は「さぼったという言い方は適切ではない」という主旨(字義:一旦前節と区別するため、pではなくtと表記する)の発話と捉える。また、B-2の字義を「風邪で寝込んだ」(q)としよう。この解釈の下で「欠席した」をr、「欠席しなかった」をnot-rと捉えると共に、意味は似ているが別命題として「さぼった」をs、「さぼらなかった」をnot-sとしてとらえる。ここで、Y(Yoshimura(2003))の主張により、(4 B-1)の字義的解釈の「不適切」の対象が命題部の真理条件であるということから、B-1の命題部(「さぼった」)の真性が不適切(つまり偽)ということになる。わかりやすくするため表で表す(8):

(8) (4 B)の記号表記

	B-1 (MNの発話)	B-2
(i) 字義	t(さぼったという表現は不適切) 実質 not-s か ⁷⁾	q(風邪で寝込んだ)
(ii) 推意	not-r(欠席しなかった)	r(欠席した)

なお、念のため、ここで意味関係の一つである論理的含意(entailment)を記述、考察しておく。まず、意味論的にsはrを含意する、つまり「さぼった」のが真であるなら、「欠席した」も必然的に真となることになる。逆は必ずしも真ではない(つまり、怠惰ではなく病気での場合もあることから、「欠席した」(r)は「さぼった」(s)を含意しない、つまりこの推論を保証はしない)。なお、対偶的にnot-rはnot-sを含意することともなる(つまり「欠席しなかった」なら「さぼらなかつた」が導ける)。同様にnot-sもnot-rを含意しない。近似の意味ではあるが、「さぼる」と「欠席する」を同義的に扱うと解釈に与えるMNの働きが理解しづらくなるので注意したい。

また、B-2の推意はr(「欠席した」)と解釈できるが、この解釈がBの発話全体の解釈で有効となっていることに注目したい。つまり、B-1でのnot-rという読みはBの発話全体の理解の段階では取り消されていることになる。⁸⁾

ここで、考察2a、2b間の検討課題は、(4)において、問題のMN発話の推意にpとnot-pのいずれを想定し得るかということになる。(3c)での記号化と平行に考えると、(9)のように、(4B-1)でのpは「さぼった」、not-pは「さぼらなかった」となり、上の(4)(8)での記号表記ではs及びnot-sに各々対応する。

(9) 並行的な記号化

(3c-1) He didn't call the [pólis]

⇒ 発話をMN-pと記号化。ここでp=he called the police(「警察を呼んだ」)となる。

(4B-1) He didn't play truant from school.

⇒ 発話をMN-pと記号化。ここでp=he played truant from school.(「さぼった」)となる。

ここで(4)及び(8)に戻って検討しよう。(4B-1)ではnot-sが実質的な字義として想定されている。この状況において、考察2aに沿ってs((9)でのp)を推意と仮定すると、推意が取り消されている事例ということになる。また考察2bに沿ってnot-sを推意とするならば、強化の例に当たると思われる。ちなみに一つの発話に推意が複数成立する可能性は特に問題ない。Grice派の枠組みではさほど議論されないようであるが、発展形にあたる関連性理論では推意の群生を積極的に認めている(例えばweak implicaturesについてSperber & Wilson(1995)参照のこと)。

上記のことから、(4)の例は考察2群の想定に問題とはならないこと。つまり、推意によりMNとDNとを区別しようという方向性を阻害するものではないことがわかった。ただし、両者間のいずれかに優位性を持たせるものでもないことも明らかになった。

次に(4)と考察1に関して再度簡潔に触れる。上記で既にみたようにMNの否定文からDN的解釈を導出することは特に問題はなかった。(8)での議論及び注7においても、Grice派の枠組みではかなり苦しいことは詳細化により見て取れるものの、本質的に問題であるとは言い難い。⁹⁾すなわち、否定をMN一種類に収斂する考えへの反例とはならない。これは大局的にはHornの一連の二分法の主張を無効化する可能性を有することではある。

以上(4)という特殊例から、考察群に関し貢献があるか検討した。ある意味不本意な結果であるが、(4)という特殊例の存在は考察1の方向での思索も、対する考察2群の方向での思索も妨げるわけではないことが分かった。

3. 暫定的結辞

以上、Horn(1989他)の主張に対するYoshimura(2013)の指摘に起因した論考を提示した。今回は、記述的否定とメタ言語的否定とで分けられてきた否定の区分に関し、主にGrice派語用論の枠組みで検討する形で検討した。第2節での考察1は否定が一種類に収斂する可能性、考

察2では両種否定が推意の違いから区別できるか否かの検討という考察であった。相反する方向性のため両立しがたい思索であったが、両方向の延長から開けてくる展望や事象もありそうで、探究に意義があることは示せたのではないかと考える。残念ながら、考察1と2群とで特にどちらに有利・不利かという点は見えてこなかった。これは一つにはGrice派の枠組みで検討したためかと思われる。すなわち、Grice派語用論は、原始的であるが故に、現象を大枠的に捉えやすく見通しを立てやすい利点があるのだが、一方で詳細な検討が難しい。より詳細な考察には、論考の後半部や注釈で多少とも触れた関連性理論が必要と思われる。次回はこの枠組みによる問題点の検討、課題の解決に取り組むと共に更なる前進を目指したい。

今回は出発点としてはYoshimura(2013)を基にしたにも関わらず、実質的にはYの議論の出発点であるHorn(1989等)の考え、特に否定の二区分のみを検討した。つまりほとんどY自身の主張を検討していないが、次回の思索ではY自身の主張を、Y及び論文執筆者が属する関連性理論の枠組みで積極的に検討すると共に、更にはこの関連性理論の観点で、今回の思索の発展を図ると共に、H・Y両者にまたがっての優位性の検討や、更には日本語の否定文の検討にも思索を進めていきたいと考えている。

注

- 1) 最近のHorn氏の研究には二重否定を典型例とする多重否定(multiple negation)がある(例えばHorn(2011))。

Horn(2011)による例・解説によると、二重否定には大きく二種あり、論理的二重否定(logical double negation)とハイパー否定(hypernegation)がある。彼が論理的二重否定で問題にした例は(a)であり、この例では中間帯があるため、命題論理学で言うような「否定の否定で肯定と同値となる」ということはない。ハイパー否定の例としては(b)が挙げられているが、口語等でよくみられる現象で、「否定を一つ無視している」ないし「複数の否定で一つの否定相当になっている」。

(a) He's not an unhappy boy.

(b) I can't get no satisfaction.

今回の論稿との絡みで見ると、多重否定にメタ否定が関与している状況が考察の対象として興味深いと思われる。すなわち複数の否定の内一つ(以上)がメタ否定である状況の考察である。メタ否定はH式では「先行発話を反対すること」であり、先行発話を内部に持つ、つまり上階層(メタ)の否定であるので、思考実験的に大雑把に考える段階では、三つ以上否定があってもメタ否定は最上階の否定一つしか生起しえず、かつ記述的否定のスコープ内で記述的否定により否定されることはないことになる。つまり、「[一つないし複数の否定を含む発話]には何かしら不適切な問題がある」というのが近似的な解釈であり、この解釈に限定されると考えられる。この路線から実際の例の観察を進めていくと思わぬ展開もありそうで、非常に意義あることと思われるが、今回の論考がYに起因していることに限定していることから、今後のテーマとしたい。

- 2) より正確には、発話のあらゆる側面が反対される対象となりうるので、(4)でみるように命題内容に反対を表明する場合もあり得ることになる。
- 3) ちなみに、ここまでの例において実質的にnotが争点になっているが、本例においては文の代用語である“Yes/No”のnoにも留意したい。すなわち、英語において、DNもMNもnot一種類で示されるが、同

じことが“No.”にも言え、(4B)においてのnoもDN文の代用かMNのそれかではっきりしない。“No.”も状況によりDN、MNいずれの代用にも使える、つまり英語では区別されない、と考えられる節があるということである。

- 4) ここでそもそも推意がないという可能性や、推意はあるがpやnot-pとは全く異なる推意(例えばr(早くこの場を去ろう))である可能性に関しては考えないこととする。
- 5) 実際には原理上、通常のDN文でもpが推意として発生していることも考えられる。ただし、一旦発生したとしても結局矛盾命題にあたる字義のnot-pに打ち消されるためvacuousな発生ということになり、かつ関連性理論的に言えば、発生させた上で打ち消す労力をどう正当化するかという問題が生じる。が更に考えると、従来よく言われる「否定文ではその肯定文の情報を何らかの意味で前提とする」という観察を説明できる可能性はある。例えば“Aren't you coming?”では聞き手が来ることが「前提」とされるが、“Are you coming?”では特には聞き手が来る・来ないことは「前提」とはされないが、ここでの「前提」が、実はここで検討するように、暫定的に算出されても最終的に打ち消される「推意」である可能性がある。
- 6) 推意として字義と実質的に同じnot-pが生じる可能性もあるが、vacuousな算出・産出なため検討は行わない。なお注5を参照されたい。
- 7) ここで、記号での表記のみ見れば、tが実質的にnot-sを意味しているという主張は飛躍しているようであるが、上記のように、考え方としては次のようになる:「さぼったという表現は不適切である」⇒「この場合不適切であるのは(音や言い回し等数ある中で)命題内容sの真理値に問題があるからである」⇒「つまりこの場合真理値が真ではない」⇒「sの真理値が偽であるということである」⇒「結論としてnot-sを主張している」

このような考え方を扱うには、記号論理学はもちろん、命題レベルでの推論を認めないGrice派語用論は不十分であろう。発話内の字義の同定作業にも各種推論が介在するという立場をとる関連性理論でのような認知的情報処理的な観点が必要になると共に、同理論で主張されている理論概念として表意(explicature)の考えが必要になるとと思われる(Sperber & Wilson(1986)、Carston(2002)参照)。ちなみにこの場合、発話の命題内容の同定にも推論が使われるため、厳密には従来で言うところの「字義」(文字通りの意味)とは異なることになるが、今回の本論考での思索の本筋を複雑化することを避けるためにこの路線での検討はこの程度に留めておき、次の機会に譲りたい。

- 8) このように、ここでは後続発話の推意が先行発話の推意を取り消している。別の言い方をすれば、後続発話由来の情報が先行発話の情報を調整している。ここでの捉え方のように、二つの推意間での情報の調整とみるのであれば、後にくる情報の方が「強度」が高く、先行情報の強化・取り消し等修正・調整を図ることが多いようであるとの経験則に沿う現象の例示にすぎないかもしれない(ちなみにこのような情報の相互的調整作用も関連性理論では通常のことと想定されている: Sperber & Wilson(1995)、Carston(2002))。が、もしもここで取り消されている情報(not-r「欠席しなかった」)のステータスが実は(ここでの仮定と異なり)推意ではなく字義であったとすれば、更に思索を深める価値があると考えられる。通例表現された情報は推意よりも「強い」からである(故に相反する情報が言明されている場合、推意を含む場合ではなく両者とも字義レベルの場合矛盾になってしまう)。ただし、アイロニーのように、p(「すごいなあ」)と表現しつつ、実際に伝達を図る情報はその否定命題(推意)(「まったくだめだね」)であるような例、つまり字義よりも推意の方が強い事例もあることから、単純な問題ではない。この路線で進むには、Carston(2002)で主張されるように、従来の行間意の一部のみならず字義もカバーすると考えられる表意(explicature)の観点から、「字義は取り消しできないが、推意は取り消し可能である」とのGrice派の一般的スタンスから離れ、「字義も推意(等行間意)も全体として意味同定の際調整される」との関連性理論の観点で思索をし直す必要がある。

- 9) ここまで特に触れてこなかったが、(4)のような両用法であいまいと見える例ではない、いわゆる通常の否定文(DN時)をMNからの観点で実際うまく扱えるのかという観点は残るが、Yの論考では、「MNで反対を主張する対象が真理値の場合」という観点から(4)をみている節があることから、これを通常の否定文に一般化することは可能であろう。

主要参考文献

- 荒木一雄(編)1999.『英語学用語辞典』三省堂:東京.
- Ariel, Mira 2008. *Pragmatics and Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Carston, Robyn 2002. *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell.『思考と発話:明示的伝達の語用論』内田他訳(2008).研究社:東京.
- Horn, Laurence R. 1989, 2001 (2nd). *A Natural History of Negation*. The University of Chicago Press, Chicago.
- Horn, Laurence R. 2011. "Multiple negation in English and other languages," Laurence R. Horn (編) *The Expression of Negation* 収. Walter de Gruyter GmbH & Co., New York.
- Levinson, S. C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sperber, D. and D. Wilson 1986, 1995 (2nd). *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.
- Yoshimura, Akiko 2013. "Descriptive/metalinguistic dichotomy?: Toward a new taxonomy of negation," *Journal of Pragmatics* 57, 39-56.

